

# 明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)  
Institute of Oriental Culture, University of Tokyo

後藤 明  
イスラームとデータ・ベース

林 俊雄  
まずは資料の獲得を  
ユーラシア考古学の立場から

松井 健  
沖縄における環境・開発・文化



# イスラームとデータ・ベース

後藤 明

たいそうな表題をかかげたが、たいしたことを書こうとするのではない。

「東洋学研究情報センター」の前身である「東洋学文献センター」の『通信』に、「特殊語本の悲哀」という駄文を寄稿したことがある。東洋文化研究所の図書室を含めて、日本の大部分の図書館では、書籍を整理し、配架するさい、最初に「和漢書」と「洋書」に分類し、それから内容に応じて分類する。かわいそうなのは、例えば、アラビアで書かれた書籍である。それは、「和漢書」でも「洋書」でもないため、「特殊語本」とされてしまう。アラブ諸国では、日本語や漢文は「特殊語」なのだが、あるいは、ありとあらゆる言語が場合場合によっては、特殊語となるのだが、日本では、ローマ字（ラテン文字）で表記された言語と漢字と仮名で表記された十数の言語以外の、数千の言語は「特殊語」として一括されてしまう。そんな内容の駄文であった。

コンピュータに関する技術的な知識をほとんどもたない私でも、近年のコンピュータ技術の発展は、十分に認識できる。コンピュータがまだ、一般に電子計算機とよばれていた時代の初期、それが扱える文字はローマ字（ラテン文字）に限られ、言語は英語に限られていた。言い換えれば、1960年代ぐらいまでは、電子計算機にとっては、日本語も漢文も特殊語なのであり、「普通語」は英語だ

けであった。やがてそれは、カタカナを扱えるようになって、私の姓名も住所もみなカタカナ化されてしまった。しかし、アラビア語を学びはじめていた当時のわたしにとって、電子計算機でアラビア語を扱えるなどは夢にも考えなかった。

昭和49（1974）年3月刊の『東洋文庫所蔵アラビア語文献およびその関係書誌目録』という冊子がある。何人かの方に手伝ってもらい、私の責任で編纂したものである。手動のアラビア語タイプライターで、こつこつと版下原稿をつくり、作成した。この時代、英文タイプは電動であったが、アラビア語の電動タイプは入手できなかった。アラビア文字で作成したこの冊子は、刊行当時は、日本では画期的なものであった。大学の構内で冷房設備がある部屋は、電子計算機が鎮座している部屋に限られていた時代、図書目録作成にそれを利用するなどとは考えてもいなかったのである。

仮名で打ち込むと、機械が漢字に変換してくれるワープロができたときには感激した。私がそれを使いだしたのは、80年代の中ごろであった。アラビア文字を「外字」として作成し、なんとか、ひとつの文書の中に、仮名・漢字、ローマ字、アラビア文字を混ぜて扱うことが可能となった。そのころには、電子計算機は、カタカナ化されてコンピュータ

とよばれるようになり、某研究所では、大型のコンピュータでさまざまな文字を扱い、しかも、その文字で検索できるシステムを構築しはじめていた。アラビア文字をそのなかに含まれていた。コンピュータに、アラビア語文献を入力すれば、そのまま索引付きのテキストができるのである。しかし、入力・校正の手間と、それに要する経費を考えれば、それは簡単なことではなかった。

時代は、マイコンからパソコンへと急速に変化していった。私の周囲、すなわち、アラビア文字で書かれたアラビア語、ペルシア語、トルコ語などの文献をつかってイスラーム世界を研究している仲間たちも、時代に合わせていった。いまや、アラビア文字をパソコンで扱うことなど、何でもない時代になってしまったのである。しかし、仮名・漢字とローマ字、そしてアラビア文字の三種類を同時に一台のパソコンで扱うのは、いまでも簡単ではない。簡単な文書をつくることはできるのだが、全ての文字で検索できるテキストとしての文書を作ることは、既存のパソコンのソフトでは、今のところ不可能である。

さて、イスラーム世界では、活字印刷の普及はきわめて遅く、19世紀になってやっと本格化してきた。朝鮮・中国・日本、そして西欧の文化伝統とは異なり、イスラーム世界で書物とは、長い間、手で筆写した写本のことであった。アラビア文字は、ローマ字と同じく、文字数がきわめて少ないアルファベットであり、活字化するのは簡単な技術でよいのだが、それをしようなどと考えもしなかったのである。しかし、パソコンでアラビア文字を扱う技術は、日本語の場合とほぼ同じ時期に開発されていた。文字数が限られているから、アラビア語のパソコン化は、日本語のパソコン化よりははるかに容易なのである。

現代という時代の焦点であるイスラームというものを知るためには、アラビア語の古典文献が基礎となる。その文献は、膨大な量である。例えば、イスラームの預言者ムハンマドの言行を伝えた伝承（ハディース）は万の単位で残されている。数巻、あるいは十数巻の伝承集が何十点も編纂されてきた。その索

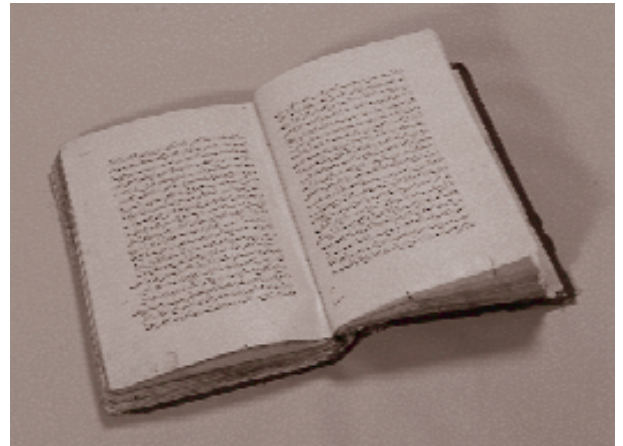


ダイバー・コレクション（東洋文化研究所蔵）から

引がまた十数巻あって、それを引くのが、かつては大変な苦勞であった。しかしいまや、重要な伝承集がデータ・ベース化されていて、そのディスクは安価で販売され、またインターネットで検索することもできる。「東洋学」の「研究情報」は、ここ数年間の間に、まさに様変わりしたのである。

しかし、である。我らが東洋文化研究所にあっては、アラビア語はいまだに「特殊語」なのである。「東洋学」の基礎は、実に多く

の「特殊語」によって書かれ、それが次々とデータ・ベース化されている。「特殊語」、すなわち「東洋学」の基礎であり、パソコンで手軽に扱える、アラビア語を含む「諸言語」が、いつになったら「東洋文化研究所」の「普通語」になるのだろうか。



ダイバー・コレクション（東洋文化研究所蔵）から

## まずは資料の獲得を ユーラシア考古学の立場から

林 俊雄（創価大学文学部教授）

センター主任より何を書いてもよいからというお話で執筆を引き受けたところ、さっそく本誌のバックナンバーが送られてきた。どの号の目次にも「データベース」、「アーカイヴ」、「電子化」といった文字がおり、それを見ただけでも「情報センター」の方向性がうかがえる。その方向と限界からはずれてしまうことは重々承知の上で、内容一任というご好意に甘えて、私事にわたることも含め、最近思っていることを書いてしまおう。

私は学部卒論では、古代テュルク時代の埋葬儀礼をテーマとした。使った資料は多くがソ連の考古学者の報告で、それをまとめるだけで精一杯だった。ただしわずかに彼らに優越を感じたのは、彼らが翻訳でしか接することのできない中国史料（正史の突厥伝など）を、原文で使うことができたという点くらいであった。

このままでは彼らの成果の追認、あるいは落ち穂広い程度のことしかできなと反省して、大学院の修論では中国史料の方を中心として補完的にソ連の考古学資料を使い、モンゴル高原における都市と農耕の起源と発展、その役割をテーマとした。こちらはある程度オリジナリティーを出せたのではないかと自

負しているが、いずれにしても遺跡になってしまった都市の規模や機能は、発掘してみないことにはわからない。しかしソ連が健在であった1970年代、西側の人間がモンゴルで発掘を行うなど、夢のまた夢でしかなかった。

博士課程に進んだ1977年、江上波夫先生からイランとシリアでの発掘に参加しないかというお誘いを受けた。西アジアは私の専門地域ではないからとお断りしたところ、いずれモンゴルや中央アジアでも発掘ができるようになるだろうから、その時のために外国での発掘を体験しておくことも無駄ではないだろうというお言葉をいただいた。まさか私の目の黒いうちにモンゴルで発掘ができるようになるとは思わなかったが、同じ乾燥地帯ということもあり、何か参考になることもあるかもしれないと思い直して、それから3シーズン、調査に参加した。

その後、80年代の後半からはソ連のペレストロイカ、中国の改革開放政策の追い風を受けて、発掘はともかく、遺跡めぐり程度のことは可能となった。そしてソ連が解体した90年代以降は、中国も含めて西側調査団による発掘が現実のものとなってきた。

私自身は民博の松原正毅教授を代表とする

科研の海外調査の一員として1991～93、95～97年、新疆ウイグル自治区、カザフスタン、モンゴル国、トゥバ、ブリヤートヤを訪れ、数多くの遺跡を踏査し、現地の研究者と交流することができた。どこへ行っても日本の経済力をあてにされて、熱烈な共同調査の申し出を受けた。これは私にとってまさにロケハンの旅であった。

たくさん見てまわった遺跡のうちから、遺跡の重要性、発掘の難易度、共同調査の相手として組みやすいかどうかなど、様々な条件を考慮して、モンゴル国西北部のオラン＝オーシグという遺跡を調査対象として選んだ。そして三菱財団から助成金を得て、1999年に待望の発掘調査をおこなうことができた。この調査については、「1999年度モンゴル調査報告」（『草原考古通信』第11号、2000年5月）と、「モンゴル高原北部の鹿石とヘレクスル」（『考古学雑誌』85巻3号、2001年2月）を参照されたい。

我々が手を着けた遺跡は調査に少なくとも5～6シーズンは必要である。翌年度からはより大規模に発掘を進めるために、科研の基盤研究（A）海外学術調査に申請したところ、Bという評価でもの見事に落ちてしまっ

た。文章がまずかったのかと反省したが、情報通の某国立博物館のG氏に尋ねたところ、ご本人も含めて考古学の申請は軒並み落とされたとのこと、過激派のG氏は久しぶりに虎ノ門にデモをかけようかと息巻いていた。

さて、話はここから本題に入る。写本をデジタル化して整理することも結構、膨大な枚数の写真をデータベース化することも結構、それらを公開することはお結構。だがちょっと待ってくださいよ。それらの資料は誰かが集めたり、撮影してきたものではありませんか。それなくしてはいかなるデータベース化もありえないではありませんか。

考古学の場合、資料・データは発掘して獲得しなければならない。「はじめに発掘ありき。考古学者は発掘とともにありき」。私は個人的な恨みつらみでこんなことを言っているのではない。考古学者が発掘を取り上げられたら、あとは人のふんどしで相撲をとるしかないのである。

ところで、欧米諸国は、旧ソ連圏やモンゴル、新疆などで、1990年代以降活発に発掘調査を開始している。アメリカはいくつかの大学がモンゴル、西シベリア、カザフスタンに入り、フランスはCNRS(フランス科学院)のH.-P. Francfortらが中心となって、ウズベキスタン、カザフスタン、新疆で活動しており、イタリアはボローニャ大学のM. Tosiやナポリ東洋大学のB. Genito、トリノ大学のA. Invernizziらが、トゥルクメニスタン、ハンガリー、ウズベキスタンで遺跡の分布調査や発掘に従事している。これらの研究者の多くはもともと西アジアで発掘していたが、アフガニスタン内戦やイランのイスラム革命、湾岸戦争の結果フィールドを追われ、中央アジア方面に拠点を移してきたのである。

最も活発なのはドイツであろう。私は1999年の3月、ベルリンにあるドイツ考古学研究所を訪れた。そのきっかけは、たまたま中近東文化センターの図書室で目にしたEurasia Antiquaという厚手の雑誌であった。そのタイトルを見てすぐ頭に浮かんだのが、Eurasia Septentrionalis Antiqua(古代北方ユーラシア、略称ESA)誌である。1927~38年

に、フィンランドのA.M. Tallgrenを主幹として毎年1冊発行され、東欧・ロシア・シベリアの考古学に多大な貢献をしたあの雑誌と、名前がよく似ている。

Band. 1. 1995(1996)の奥付けを見ると、雑誌の副題としてZeitschrift für Archäologie Eurasiensとあり、ドイツ考古学研究所Deutsches Archäologisches Institutのユーラシア部Eurasien-Abteilung発行となっている。同部はユーラシア草原とその南方の高文化地帯に研究領域を広げる目的で1995年1月に研究所の中に設置され、黒海北岸、カフカス、中央アジア、シベリア、モンゴルから中国北部に至るまでの地域を研究の重点とするという。

扉にはタールグレンの写真が掲げられ、編者の前書きを見ると、1930年代末にソ連からの情報の途絶によって廃刊に追い込まれたESAの遺志を継ぎ、近年のロシアにおける政治状況の変化を利用して発刊することが述べられている。予感当たっていたわけだ。こうなるとどうしても訪問して、くわしく話を聞いてみたい。ちょうどその時ベルリンには畏友、森安孝夫大阪大学教授が滞在していたので、早速ベルリンにのりこみ、同教授とアカデミーのW. Sundermann教授を介して、ユーラシア部のH. von Gall博士を紹介してもらうことができた。

まだ肌寒い3月5日、森安教授と2人で地下鉄に乗り、ベルリン西郊のPodbielski駅で下車した(美術館で有名なダーレムの1つ手前)。駅舎はかつての田園調布駅を小さくしたような鄙びた建物である。通りの両側には、広い敷地の中に木立に囲まれて大きな民家がぼつんぼつんと立っている。春たけなわともなれば、濃い緑に覆われることだろう。ズンダーマン教授に教えられた住所を頼りに通りを南東に進むと、右手にモダンなガラス張りの建物が現れた。これがドイツ考古学研究所である。受付で聞いてみると、ここはギリシア・ローマ古典考古学部で、ユーラシア部は駅の反対側にあるという。逆戻りすると、駅からわずか1分のところだった。周囲と同様に、ここも広い敷地の中に民家風の建物が点々と立っている。

ガル博士は温厚な白髪の紳士であった。専門はイラン考古学であるが、最近ではサルマタイ美術に関する論文も書いたと言って、それが掲載されている雑誌をくれた。それはよく見慣れた淡いクリーム色に濃い緑色で誌名が記されたArchäologische Mitteilungen aus Iranではないか、と思ったのは早とちりで、何とArchäologische Mitteilungen aus Iran und Turanと記されているではないか。聞くと、前号(Band. 28)から誌名が変わったのだという。Turanとは知る人ぞ知る、イランから見た中央アジアのことである。扉の上部にはDeutsches Archäologisches Institutの下に、Eurasien-Abteilung, Aussenstelle Teheranとある。かつて独立した部門であったテヘランの研究所が今やユーラシア部所属の支部になってしまったのである。

ユーラシア部のH. Parzinger筆頭部長によれば、テヘランの研究所は現在閉鎖しているが撤去するつもりはなく、いずれ再開する予定であるという。実際、3日後に再び研究所を訪れると、部長はイランへ旅立って不在であった。ここで思い出したのは、かつてテヘランにあった日本研究所である。様々な分野の研究者や現地雇いの代理人が常駐し、発掘調査団にとっては機材や資料の保管場所としても利用できる便利な施設であった。ところがイスラム革命が起きるや日本政府は早々に研究所を撤収し、以後、西アジアに常駐研究施設は置かれなくなってしまった。

部長によると、同部は現在バルカン半島から中国北部に至る草原地帯の15ヶ所でプロジェクトを進行中であり、さらにモンゴルやトゥバでも開始する予定であるという。部長や博士からはほかにも興味深い話をたくさん聞くことができたが、もはや紙数も尽きた。私は科研に落とされたから僻んでこんなことを言っているのではない。西アジアもさることながら、もっと日本に近い北京やウランバートルに研究拠点を設けて海外調査をやりやすくし、資料を獲得・蓄積して公開すること、これこそが文化国家日本の使命なのではないだろうか。

# 沖縄における環境・開発・文化

松井 健

1999年1月から、日本学術振興会未来開拓事業「アジアの環境保全」に、参加することになった。「アジアの環境保全」という総題のもとにおこなわれているいくつかのプロジェクトのひとつで、なかでもっともおくれて出発したプロジェクトに参加することになったのである。そのタイトルは、「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究」で、プロジェクト・リーダーは東京大学大学院医学研究科の大塚柳太郎教授。そのもとに、国立歴史民俗博物館の篠原徹教授と私が集まって、プロジェクトの骨子をつくった。アジア太平洋地域から、3つの島嶼社会（ソロモン諸島、海南島、沖縄列島）を選び、そこで起こっている開発現象と、それが地域社会に与える影響を検討し、開発が当該社会の人びとの生活に及ぼす悪い影響を最少にするにはどうすればよいのか、その方策を提言しようという計画であった。小さくまとまっていた、外部世界と一定の距離のある島嶼世界では、開発のもつインパクトが把握しやすという判断があった。

この未来開拓事業は、産業界からの寄付金によって支えられており、課題そのものがトップ・ダウンに与えられるという、科学研究費などとはまるで違う枠組みで進められるのである。いわゆる産学共同研究のひとつであり、それだけに、成果を出すことが至上命令となる。こうしたプロジェクトの性格と、すくなくとも私の側での問題意識のかみあわせがうまくいかず、計画立案当初、とまどうことも多かった。こうしたこともあって、大塚プロジェクトが正式に発足するまでに、1年間以上の時間がかかり、動き出すのが1999年度も末になってしまった。

実際にこのプロジェクトを始めると、3つの地域ごとの間の文化的社会的政治的な状況のずれと、その位置を相互にどのようなものとして指定するかについて、個別の地域での研究とともに、相互の対比検討のもとに問題野の座標軸を早急につくっていく必要があることがわかってきた。たしかに、沖縄がよきにつけ、あしきにつけ、開発がもっとも進んでおり、上下水道、ガス、電気、道路網等の

インフラももっとも整備されている。しかし、ソロモン諸島の木材伐採に対するそれぞれの集落の反応や、海南島のいくつかの集落で見られる政府主導の開発(あるいは、まったく逆方向の自然保護)に由来する生活設計の戦略の多様さは、沖縄の状況と対比すると、問題の本質が案外相互に近いものであることを示唆してくれる。座標軸の設定は、それほどの困難なく、関与要因の一定の抽象化によって可能になるだろう、という予想は立った。

ここでは、あまりに問題が拡散するので、3地域の比較という、大塚プロジェクトの核心を正面から論じることはできない。とはいえ、沖縄における環境と開発と文化の問題が、大きくて複雑にからまりあった系となっていることを示すために、ほかの地域についてあらかじめみておくことは必要であろう。ソロモン諸島で一番問題になっている木材の伐採も、海南島における集落周囲の森林の利用の程度(奨励されるにせよ、政府によって厳しく自然保護のために禁止されるにせよ)も、そこの住民にとっては、まったく外部からの介入によって生起している問題である。ソロモン諸島で伐採された木材は、外国にチップ材などとして輸出される。皆伐された跡地は、ソロモンの人たちの集落に災害をもたらす可能性があるばかりではなく、彼らの在来の漁業や農業、採集活動などに悪影響をもたらす。彼らにとって大切な宗教的な意味をもつ、聖なる林を誤って伐採してしまったという例もある。海南島では、中国の経済自由化によって、人びとの関心は、より効率的な換金作物、森林資源の獲得に向けられている。森林を開拓して畑地化しようという動きと政府の森林政策のかかわりが、大きな今日の問題となっている。

地域の人たちは、現在では、昔のように外部世界の動向にまったく無知ではない。ソロモン諸島でも海南島でも、地域の住民は外部からの開発や開発禁止(保護)の動きに対して、かなり正確な情報をえつつ、自分たちの生活上の要求をどのようにして満たせばよいのかを考えて行動するようになっている。ソロモンでは外国資本が、海南島では政府が、

かなり強い開発あるいは開発禁止(保護)の圧力をかけるなか、住民たちは自分たちにとって最良と思われる方向での個々の企図をおこなう。それは、彼ら自身の社会のなかでも、いろいろな葛藤や紛争となる可能性をもちつつも、彼らの社会の変化の大きな動力となっているようにみえる。グローバル化は、もはや個人化されたかたちで、意味をもち始めているのである。

このように、ソロモン諸島や海南島における開発の影響を眺めてくると、沖縄に噴出しているいくつもの問題も、けっして性質を異にするものとは思われない。沖縄には、ソロモン諸島や海南島にはみられない、いくつかの歴史的状況があるが、そうした個別性は、ソロモン諸島でも、海南島でも、それぞれにみられることである。

沖縄列島における開発の問題を、環境とのかかわりで見ると、復帰(1972年)前後から現在にかけて、ずい分と状況が変化してきたことを指摘できる。復帰直前から復帰に続く海洋博の時期には、大型リゾートホテルやゴルフ場、別荘地の開発がおこなわれ、港湾の大規模な改修、海浜に立地する工業団地の造成などがみられた。一部は、バブル期までもちこされたが、近年では、より沖縄の立地の固有性を前面に出した観光開発、地域活性化のための開発がうたわれるようになってきている。とはいえ、開発計画そのものが長期にわたっているときには、当該地域の住民自身がその計画をよく知らないというような場合もあり、計画自体もバブル期のままで2001年になって具体化されるようになった泡瀬干潟の干拓のような例もある。

1998年の時点でみても、沖縄における開発と、その影響は、非常に多様なかたちをとっており、そのいずれにしても、一見、政治的経済的にみえる錯綜した利害関係の奥には、深い社会的文化的な諸問題の伏在が予感された。そんななかで、すくなくとも、1998年の時点でもっとも尖鋭に問題がでている局面と、1972年の復帰当時におこなわれた開発が30年近くたった今どのようなになっているのかという回顧的な局面との、二面につい

での調査が不可欠と思われた。前者については、もっとも今日的な問題に対して実践的提言をおこなうために、また、後者については、開発という問題はけっして一過的な現象としてではなく、長期に及ぶ住民とその四圍の生活環境の変容の問題として扱うという視点を確立するために、沖縄でのプロジェクトではまず必須のことと思われた。後者の検証は、前者の研究のための前提ともなると思われた。

歴史的、回顧的な視点によって、ソロモン諸島や海南島のような他地域との比較のために必要な、沖縄の状況の通時的な変化についての一連のヴィジョンを用意することができると考えられた。ソロモン諸島や海南島の今日的状況が、沖縄の過去のひとつのコマにそのまま当てはまるはずはない。むしろ、時代的な変化にかかわる諸要因の力関係を分析するときに、沖縄の提供するヴィジョンは重要な類型のひとつとなると思われる、ということであった。

これら二つの局面についての調査をおこなうフィールドとしてどこを選択するかは、当プロジェクトのようにトップ・ダウンで課題が決められ、強く成果を求められるときには、重大な判断となる。今日的な問題としては、八重山諸島における観光開発を、回顧的歴史的に開発現象を分析する場としては、与勝半島と平安座、宮城、伊計の島々を結ぶ海中道路を具体的なフィールドとして決めた。これは、長い間、沖縄で調査してきた、私の勤に頼っての選択であった。

とはいえ、いささか心配があったので、プロジェクト・リーダーの大塚さんと、海南島を中心に調査を構想している篠原さんと3人で沖縄のいくつかの場所を歩いて、意見を交換した。私も自分の選択に、これで、かなり自信をもつことができた。

そして、分担して調査に当たってくれる人たちとして、八重山諸島の観光開発については、東京工業大学大学院博士課程の松村正治さんを、与勝の海中道路については福島県立博物館学芸員の佐治靖さんと帯広畜産大学講師(当時)の関礼子さんに声をかけて、快諾をえた。松村さんは博士論文のテーマとして観光の問題を考えていたということで、これに開発の視点を加えてもらうことにした。

佐治さんは、福島を中心に、二ホンミツバ

チの養蜂やウグイ漁、養蚕など、動物にかかわる民俗について、腕力のある仕事をまとめている方で、そのフィールドワークの能力を見込んでお願いした。関さんは、もともと環境社会学専攻で、プロジェクトのテーマには、もっとも近くで仕事をしてこられた。長期的なフィールドワークによって、沖縄の島の人たちの生活の具体相と情感を知ってもらえば、おそらく彼女の仕事は厚みを増し、大きく展開するのではないかと、という私の勝手な期待もあった。

チームを組むことになったこれら3人の方がたは、全て、沖縄初体験という点では共通していた。松村さんも、アンケート調査やインタビュー調査はやっておられた関さんも、フィールドワークを基礎的な方法として、人びとが開発やその影響と対面し、またそのもとでどのように生活しているのかを、まず明らかにしようという私の意図からは、けっしてフィールド派ではなかった。佐治さんも、沖縄は初めてで、民俗学の数日間の集中的聞き込みとは勝手の違う調査の方式を選んでもらうことになった。

沖縄をフィールドにしている、あるいは、したことがある、私と専門の近い、環境や自然に興味のある研究者仲間は、あえて、チームに加わってもらわなかった。私としては、まったく初めての実践にかかわるテーマを、まったく新しい見方の仲間と始めたいという、個人的な希望があった。ほかでもない、このプロジェクトにまったく新しい展開を期したためであった。沖縄についての最低限の情報と、フィールド、テーマの方向性については、私がごく手短かなガイダンスをおこない、第一回目の沖縄本島と八重山諸島のフィールドワークだけは、チーム全員で与勝半島周辺と石垣、西表、竹富の各島を中心に廻ることにした。そんなおりに私が気づくことは、チームの方がたに伝えた。こうして、2000年度から、沖縄での調査が始まった。私は、直前の2000年3月には海南島を、篠原さんたちとともに訪れ、おおよその問題のありかたと現地の状況についても手がかりをえることができた。

これまで、調査研究費をえる代表者となったことがなかったわけではない。1994年から96年までの3次にわたるインド亜大陸の宗教、民族紛争の生成と回避のメカニズムにつ

いての人類学的研究という科学研究費による海外学術調査の代表も努めた。しかし、このときも、どちらかという、自分は自分の調査をするという姿勢で、成果は、参加してくれた仲間たちのそれぞれの貢献からそれなりに姿をなすだろうというふうに考えてきた。幸い、このようにして、『東洋文化』第80号に、「インド亜大陸の宗教・民族紛争」という特集を組み、調査メンバーから力作の論文を寄せてもらい、充実した成果報告をおこなうことができた。

しかし、今回のプロジェクトは、私自身の専門からもかなり離れた、しかもけっこう困難なテーマを、私自身のリサーチ・デザインにそって、ほぼ2000年度と2001年度での調査をもとに、実践的提言にまでもっていくというものであった。正直なところ、私自身の能力についても、3人のチームを組んだ方がたのフィールドの成果についても、心配がなかったわけではなかった。それなりに厚い沖縄地域の民俗学、民族学、文化人類学の、とくに社会構造や宗教祭祀についての蓄積を、私の短いガイダンスで十分に伝えられようはずもなかった。

結論からいえば、これは杞憂であった。3人の方がたは、私の想像をはるかに越えた成果をあげて下さった。すでに、2000年度調査の結果は、『アジア・太平洋の環境・開発・文化』第2号に印刷されているので、すぐに参照していただけるようになっている。ここでは、残りの紙幅を利用して、これまで(2001年7月)の調査で明らかになってきたことについて、私なりのコメントを付け、このプロジェクトの沖縄での今後の展望についてふれておくことにしたい。

環境と開発の問題は、これまで、いつも二項対立的に論じられてきた。環境保護派は、いかなる開発も許さず、開発派は経済的利点をあげて、多少の環境破壊はやむをえない、とするような、まず政治的なレベルでの対立があった。実際、一度破壊された自然はいかにしても、元にもどらないから、環境保護派の言い分はもっともであった。しかし、沖縄などでは、土木業や建設業関係のさまざまな規模の企業のみならず、そこにいろいろなかたちの職をえて土木・建設労務についている人たちも多く、農民のなかにも、こうした分野でえる日雇い労賃をかけたがえのない収入

としている人たちがいる。これらの人たちにとっては、開発にかかわる仕事はきわめて重大な経済的意味をもっていることもたしかで、彼らにとっては、環境保護派の人たちの言い分は、まるで彼らの生きる現実を無視した、理想主義の空論に思われることもうなずける。かくして、開発と自然保護は、まったく妥協の余地のない対立をなす。

そして、この対立は、せいぜいつぎのような妥協点を見出す以外に、解消のされようがないのだ、とされてきた。その妥協点というのは、開発によってもたらされる経済的な利益や生活上の利便性を一方で見測いながら、もう一方で、耐えられる範囲内の環境の改変（これは、ほとんど破壊と同義語なのだ）を許容するということを意味している。

しかし、このあまりに当然に見える解決策には、いくつもの本質的な欠陥がある。しかも、その欠陥は、純粋に学術的なレベルから、きわめて実践的なレベルを横断しているという意味できわめて重大である。ここでは、紙幅の都合から、根底的にみえる問題をひとつだけあげる。それは、自然の意味や評価といったときに、何を尺度とするのかについて、十分な検討がなされていないという問題である。

自然な、といっても、人間がたち入ったことがないという意味での原生自然ではなく、土地の人びとは過去においても現在においてもいろいろと利用している森林があったとしよう。この森林の価値というときに、この森林を伐採して、木材として売ったときの価格を価値というのだろうか（これは、今日、まさにソロモンの人たちが直面している状況である）。それとも、この森林を手つかずに保護して、観光資源として役立てるときの経済効果をいうのだろうか（人口増加で悩む海南島の村人が、村の外に広がる森林から締め出されるのは、この論理によってである）。

おそらく、このように議論していくと、自然の価値の意味をはかるための尺度が、すくなくともかなりの数ありうることに気づく。私は、『自然の文化人類学』（1997年、東京大学出版会）において、「自然の本源的優越性」という考え方を提唱したが、これもその尺度のひとつである。換金についても、よく知られているように、材木にして売り払うというような粗野な方法ばかりではなく、「森

林を保全するために、どれくらいのお金を払いますか」という想定問答を課する、より「洗練」された方法も考案されている。

しかし、実際には、そうした森林と周辺の人たちがどのようにつきあい、利用し、恩恵をこうむり、祭りをおこない、昔話で語り、そして、日々その森林を眺め暮しているのかについては、調べられることもまれで、通常そうしたことはいかほども知られてはいない。外部から、その森林のある土地を開発しようという立場の人は、まずこんなことは知らないし、知っても意味があるとは思わないだろう。そして、より問題となるのは、その森林のすぐそばで生活している人たち自身が、そうしたことをあまり意識しないということなのだ。

沖縄で、毎年埋め立てられていく広大なサンゴ礁や干潟、亜熱帯の稀有な原生林（これもアメリカ軍の訓練場だった、という逆説のために生きのびたと逆説的にいう人もいる）、河口のマングローブ林などの意味は、生物学的生物地理学的なものによって左右されるのではない。そこで、タコや貝やアイゴの稚魚を捕り、海草を集め、イノシシを追い、テナガエビをすくい、シレナジミヤガザミをとっている人たちの生活が忘れられてはならない。最近、沖縄各地でみられるように、人手が入らなくなっかえて荒れてしまう植物景観のことを想起するまでもなく、これらの自然は、人間との密接な関係でその姿を保ち、意味をもってきたのだから。そして、それらは、それゆえに貴重な純粋に沖縄的な、いいかえれば「文化的な自然」景観なのである。しかも、これはすこしぐらいの環境破壊は十分に許されると考える人たちが、自らにいい聞かせるような、熱帯地方の最北部の小さな列島に残る、安手の亜熱帯ではないのである。マングローブ林を例にしても、すでに、中国南部からベトナム、そしてほとんど東南アジア全域で、エビや魚の養殖場や工場地帯に姿を変えて、その稀少性を強めつつあるのである。

沖縄の人びとの暮らしにおける自然とのつきあいは、乱暴な自然の改変、破壊があっても、条件さえ許せばかたちを変えて再構される。海中道路と石油備蓄基地がつくられたあとの与勝では、地先漁は全滅したが、モズクの養殖がおこなわれ、季節がくるとイモ貝の

擬餌でアナダコをとる人たちを遠浅に点々とみることができる。現在、私たちがまず重点をおいてやらなければならないことは、沖縄の人たちとその生活環境のかかわりの変遷であり、それは、どうも、いつもゆれ動いていたようなのである。だから、後者の変動を人びとがどのようにうけとめて、再び一見安定してみえる関係をつくりあげていくかというプロセスをみきわめることをまず考えるべきなのであろう。

人びとの生活も変化し、生活環境も変化する。両者の関係は、ときに安定し、不安定になる。それが、破局的になることがないようにするためのガイドラインを明らかにするためには、やはり、その土地の人たちの自然とのつきあいの具体相を、その過去から現時まで、徹底的に知ることから始めなくてはならないだろう。開発を前にして、その態度を決めなくてはならなくなった住民が、どの程度自らの生活環境の価値や意味を、その生活実践のなかで自覚するのか、はとて重大な問題となるだろう。同時に、開発を計画する側に、十分な情報がもたらされ、すこしの経費や能率のために土地の人びとやその生活領域に過重な負担を強いることがあってはならない。地域の人たちが、開発に期待することをよく把握して、故意にそれを無視するようなことも許されまい。

この情報のための回路と、そこにのせるべき情報について、ようやくおおよそのイメージがえられるようになった。そして、その情報内実は、このプロジェクトの当初に考えてきたとおり、あくまでも、その土地における人びとと自然との、住民とその生活場との具体的ななかかわりの文化であることは間違いのない。

付記 本稿は、書き始めのときの方針と異なり、沖縄においておこなわれている大塚プロジェクトの正確なレビューとはまったく違ったものとなった。八重山の観光開発や与勝の海中道路と石油備蓄基地の影響については、上記のレポートを参照願います。今のところ、大塚プロジェクトの具体的な作業手順としては、『アジア・太平洋の環境・開発・文化』第1号にあげられている方法概念を軸にしたマニュアルづくりへの資料の整理が始まっている段階にあることを申しそえておきます。

# センター便り

## 平成13年度漢籍整理長期研修

今年も例年のように漢籍整理長期研修が実施された。研修期間は夏休みの前と後の2期に分かれ、前半は6月25日から7月6日まで、後半は9月25日から10月5日までであった。今年から新しい試みが始まり、研修の一部が、東大大学院人文社会系研究科文化資源学専攻文書学専門分野の授業を兼ねることになった。参加者は、大学図書館の司書6名、院生5名であった。講師としては、東洋文化研究所のスタッフの他に、所外から、大塚秀高（埼玉大）宇佐美文理（京大）小島毅（東大・文）中善寺慎（東洋文庫）長澤孝三（国立公文書館）高橋孝信（東大・文）横山謙次（宮内庁書陵部）安藤清（同前）藤本幸夫（富山大）持井康孝（金沢大）の諸先生にご助力を賜った。また東洋文庫と内閣文庫には見学の便宜を図っていただいた。ここに記して謝意を表させていただき次第である。

### 客員教授

今年4月から客員教授を、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所の井出誠之輔情報調整室長をお願いすることになった。井出客員教授は東アジア絵画史がご専門である。

### インド・イスラム史跡データベース

センターでは深見奈緒子前客員教授を中心に、1960年代初めに東京大学インド史跡調査団が撮影したデリー・サルタナット時代のイスラム建築写真をデータベース化する作業を進めている。デリー以外の地域に散在する遺跡197件の写真700点余りのデータベース化が終わり、ホームページで公開中である。

### 5センターセミナー

今年の「全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナー」（略称5センターセミナー）は、11月19日（月）と20日（火）の両日、東京大学総合図書館会議室で開かれる予定である。このセミナーは、東京大学法学部附属外国法文献センター、一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター、神戸大学経済経営研究所附属経営分析文献センター、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センターと当センターが共催するもので、今年の共通テーマは「人文社会情報とIT」となっている。センターが分担する「IT活用のフロンティア」（11月19日午後3～5時）というセッションでは、次の二つの発表が行われる予定である。

井出誠之輔（センター客員教授・独立行政法人東京文化財研究所情報調整室長）

「美術史における研究画像の現況」

山本和也（東京大学大学院情報学環助手）

「社会科学におけるコンピュータ・シミュレーション 社会構造、国際関係、世界システム」

### 第1回東京大学東洋文化研究所公開講座「アジアの芸」

東洋文化研究所では創立60周年を記念して、「アジアを知れば世界が見える アジアの芸」という公開講座を開く予定です。申込は10月31日までにハガキかメール（koza@ioc.u-tokyo.ac.jp）で東洋文化研究所研究協力掛（tel. 03-5841-5836）まで。プログラムは次のとおりです。

12月1日（土）13：00～16：30 東洋文化研究所大会議室

小川裕充「ヨーロッパでも、日本でも、インドでもない、中国の絵画とは？」

羽田 正「絢爛たるイスラム建築」

12月2日（日）13：00～16：30 東洋文化研究所大会議室

松井 健「焼き物の魚、アジアを泳ぐ 工芸と美の人類学・ことはじめ」

大木 康「中国小説に学ぶ知恵」

東洋学研究情報センター運営委員会委員  
(2001年度)

#### 所外委員

落合 卓四郎 附属図書館長、大学院数理科学研究科・理学部教授

Ch'en, Paul Heng-Chao  
大学院法学政治学研究所・法学部教授

川原 秀城 大学院人文社会系研究科・文学部教授

岩本 純明 大学院農学生命科学研究科・農学部教授

中兼 和津次 大学院経済学研究科・経済学部教授

村田 雄二郎 大学院総合文化研究科・教養学部助教授

田嶋 俊雄 社会科学研究所教授

小林 宏一 社会情報研究所教授

松井 洋子 史料編さん所助教授

#### 所内委員

松井 健 教授 汎アジア部門

平勢 隆郎 教授 東アジア研究部門(第一)

大木 康 助教授 東アジア研究部門(第二)

小川 裕充 教授 東アジア研究部門(第二)

永ノ尾信悟 教授 南アジア研究部門  
委員長

鎌田 繁 教授 西アジア研究部門

中里 成章 教授 センター造形分野

宮脇 博史 教授 センター文献分野

板倉 聖哲 助教授 センター造形分野

#### センター長

原 洋之介 教授、研究所長

#### センターのスタッフ

原 洋之介（はら ようのすけ）センター長・東洋文化研究所長。東南アジア経済。

中里 成章（なかざと なりあき）センター主任・造形資料学分野教授。南アジア近現代史。

宮脇 博史（みやじま ひろし）比較文献資料学分野教授。朝鮮近代史。

板倉 聖哲（いたくら まさあき）造形資料学分野助教授。東洋絵画史。

太田 省一（おた しょういち）センター助手。アジア建築史。

井手誠之輔（いで せいすけ）客員教授。東アジア絵画史。

佐々木郁子（ささき いくこ）業務掛長。

#### 明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学  
研究情報センター報 第6号

発行日 2001年11月1日

編集・発行 東京大学東洋文化研究所  
附属東洋学研究情報センター

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話 03-5841-5839(直通)

FAX 03-5841-5898

ホームページ

<http://www.info.ioc.u-tokyo.ac.jp/>